

6

(木)

もうひとりの放蕩息子

ルカによる福音書一五章25〜32節

兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。(28)

弟息子の帰りを一緒に喜ぶことが出来ない人がいました。父の家でまじめに働いてきた兄でした。放蕩の限りを尽くして財産を使い果たした弟を父が大喜びで迎え入れたと聞いて、真面目に生きてきた自分が正しく評価されていない、と怒ったのです。この兄は父親の最も近くで生活しながらも、息子たちに対する父の大きな愛が分かっています。ここにもうひとりの放蕩息子がいたのです。ここに聖書が語る罪とは何かが見事に表されています。それは放蕩の生活をするのではなく、父なる神から遠く離れて生きることです。この父親は宴席を中座して兄息子をも迎えに出てきます。父にとっては弟だけでなく、怒りに震える兄もかけがえのない息子だったのです。父なる神に招かれていない人など一人もいません。神は全ての人に、「さあ、帰っておいで」と呼びかけておられます。